

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ) -

目	次
○連載 和算資料の電子化(7) : 江戸の天文暦学..... 1	○最近の話題から(その2)「姫国山海録」.....25
○全学教育科目「図書館を活用した情報探索・ レポート作成術」を開講..... 6	○平成16年度図書館職員総合研修会を開催.....27
○漱石・絵葉書・水彩画..... 8	○平成16年度情報検索講習会(外国語文献) Web of Scienceの-基礎-の開催.....28
○平成16年度 東北大学附属図書館企画展 「江戸の数学-いま,和算がおもしろい!-」 開催報告.....14	○会 議.....29
○第36回国連寄託図書館会議に出席して.....18	○人事異動.....30
○一橋大学社会科学古典資料センター主催 第24回西洋社会科学古典資料講習会を受講 して.....24	○編集後記.....30

連載 和算資料の電子化(7) : 江戸の天文暦学

九州大学大学院比較社会文化学府 平 岡 隆 二

江戸時代の日本で、和算と密接な関係にあった学問の一つとして、天文暦学を挙げることができます。現在「和算家」として知られる人々の中にも、天文暦学について研究した人が少なくありませんでした。たとえば「算聖」として知られる関孝和(17世紀中頃-1708)には暦学に関する著作がありますし、江戸中期に活躍した和算家の山路主住(1704-1772)は、幕府の天文方として官暦の作成に従事しています。ま

た現存する和算家の蔵書を調べてみると、その中にはかならずといってよいほど天文暦学書が含まれており、この二つの学問の緊密さを窺い知ることができます。

しかし、和算の伝統が日本国内におけるかなり内的な発展を遂げたのに対して、天文暦学の方は、中国から渡来する知識を足掛りとしつつ、初期の南蛮系や中後期の蘭学・洋学系など、西洋から直接もたらされる知識をたえず摂取しな

がら発展を遂げました。それらの外来知識は、江戸時代に計四回行われた改暦の理論的基盤となっただけでなく、望遠鏡の伝来や、地動説の紹介などを通じて、江戸人の世界観や宇宙像に大きな影響をおよぼしました。そのため、当時の日本で成立した天文暦学資料を、科学史、思想史、さらには東西交流史の結節点として位置づけることができます。

現在電子化が進められている東北大学収蔵の和算資料の中にも、数多くの天文暦学資料が含まれています。とりわけ、写本等の手稿資料については、資料的価値の高いものが少なくありません。ここでは、その中からいくつかの資料を取り上げて、紹介してみたいと思います。

1. 南蛮宇宙論

1549年のフランシスコ・ザビエル鹿児島上陸以降、次々と日本に渡来したキリスト教の宣教師たちは、数多くの西洋の文物や風俗とともに、彼らの持っていた西洋の天文学・宇宙論に関する知識を伝えました。それらの知識は、「南蛮宇宙論」あるいは「南蛮天文学」「キリシタン天文学」などの名前で総称されていますが、その代表的著作が『乾坤弁説』です（狩野 8 - 21234, 図 1）。



図 1 『乾坤弁説』

本書は、クリストヴァン・フェレイラ (Christovão Ferreira, 1580? - 1650) という

ポルトガル人によって、17世紀中頃にある西洋の天文書から日本語に翻訳されたものと伝えられています。フェレイラは、イエズス会神父として慶長十四(1609)年に日本に渡来しましたが、布教中に捕えられて拷問によって棄教し、後に「沢野忠庵」という日本人名を名乗った人物でした。

本書の内容は、近代科学誕生以前の西洋で幅広く受け入れられていたアリストテレス・プトレマイオス的世界像におおむね依拠しており、四元素説に基づく気象現象の説明や、球形の大地をいくつもの天球が重層的に取り巻くという宇宙構造論(いわゆる天動説)など、天地全般にまつわる事象が幅広く取り上げられています(図 2)。



図 2 四元素とその性質の模式図

また本書の構成を見てみると、フェレイラによる本文の各章ごとに、日本人儒医の向井玄松(1609 - 1677)による詳しい注釈が付されています。これらの注釈は、長崎奉行の命によって向井が付したのですが、この部分を読み解くことによって、当時西洋の学術思想と対峙した日本人学者の反応をつぶさに窺うことができます。したがって、この注釈の存在が本書の内容をより豊かなものにしていくといえるでしょう。

また『乾坤弁説』には、いくつかの異本の存在が知られています。その一つが『南蛮天地論』です（林集書1687, 図3）。その本文テキストは、『乾坤弁説』の本文とよく類似した内容をもっています。ただしその中には、『乾坤弁説』にはない中国系医書（『素問』『格致餘論』など）の引用が頻繁に見られるなど、独自の特徴も有しています。

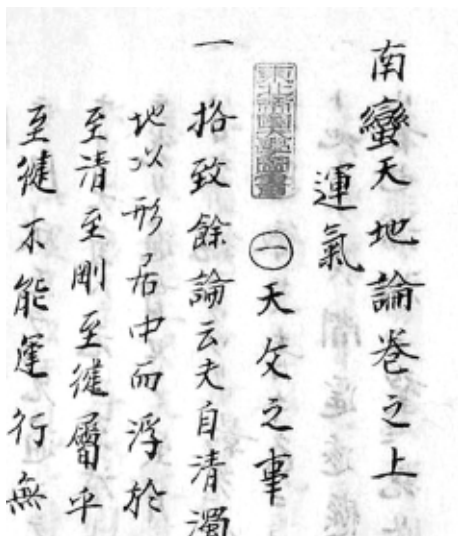


図3 『南蛮天地論』

『乾坤弁説』と『南蛮天地論』の両書は、西洋科学伝来の黎明期について研究する上で重要な情報を提供する歴史資料ですが、その成立過程や写本の流布状況については、まだまだ不明な点が少なくありません。いずれも今後の重要な研究課題といえます。

2. 蘭系知識の翻訳と流布

江戸中期以降になると、オランダ語で書かれた書物を通じて西洋の学術・知識を研究すること（蘭学）が盛んになります。天文暦学についてもいくつかの蘭書が翻訳・紹介され、その情報はかなり広範囲に流布しました。

図4に掲げた『紅毛測量器』（林文庫2611）は、その流布の一形態を物語る興味深い資料です。本書の成立過程や作成者はまだ明らかにされていませんが、その中には阿蘭陀通詞の本木良永（1735 - 1794）による『和蘭海鏡書』（18

世紀後半訳出）からの引用がいくつか見られますので、本書の成立も18世紀後半以降と考えられます。本書にはこれ以外にも、南蛮宇宙論書の一つである『二儀略説』からの引用や、「紅毛人」（オランダ人の称）から聞いたという話も紹介されるなど、他ではあまり見られない貴重な情報が散見されます。今後多方面からの研究が期待される、興味深い資料です。

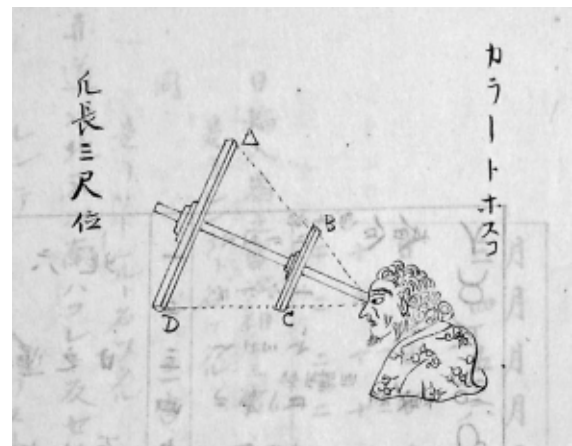


図4 『紅毛測量器』

また、阿蘭陀通詞の志筑忠雄（1760 - 1806）の訳述した『暦象新書』は、蘭系天文書の代表作の一つと言えるでしょう（林文庫2872 図5）。



図5 『暦象新書』

本書は上・中・下編の三編から成り、それぞれの編の凡例に記されている通り、寛政十（1798）年から享和二（1802）年にかけて成立したものです。その原著はJ・ケイル（John Keil,

1671 - 1721) がラテン語で著した『真正なる自然学および天文学への入門書 Introductiones ad veram Physicum et veram Astronomiam』(1725年)ですが、志筑が参照したのはオランダのルロフスによる蘭訳本でした。

志筑はその訳文中の至るところで「忠雄曰」として頻繁に補説を付していますが、自らの考えに基づく新説も多数加えており、そこに彼独特の思索の展開を見ることができます。とりわけ、下編の末尾に付された「混沌分判図説」は有名で、それがカント・ラプラスの太陽系成因に関する星雲説と類似した内容を持っていることを初めて指摘したのは狩野亨吉でした。その論文「志筑忠雄の星気説」(安倍能成編『狩野亨吉遺文集』所収)は、今も色あせない輝きを持っています。

3. 幕府天文方資料

天文方は、江戸幕府において暦の作成など天文暦術に関することをつかさどった役職です。この役職そのものは、1684年に「貞享の改暦」を成功させた渋川春海(1639 - 1715)の初代天文方就任に端を發しますが、歴代の天文方たちは、江戸時代の天文暦学史上、あるいは洋学史上において、さまざまな重要な役割を果たしました。

図6に掲げた『明時館叢書』(林文庫2862)

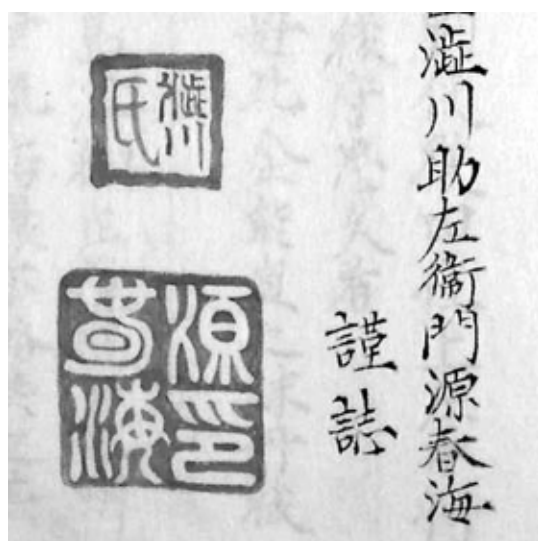


図6 『明時館叢書』

には、初代春海以来の天文方関係文書の断簡が多数再録されています。本資料は、江戸後期に天文方をつとめた渋川景佑(1787 - 1856)の編集にかかるものと考えられていますが、その中には、すでに失われてしまった書翰の写しなどが多数含まれているため、天文方の歴史を語る上で重要な情報源となっています。

また時代が幕末を迎える頃になると、西欧列強による外圧の高まりを受けて、天文方は洋学の教授・統制や洋書の翻訳をつとめるようになります。その頃の天文方の活動を伝える資料が、『暦作測量御用留』です(林文庫2856, 図7)。

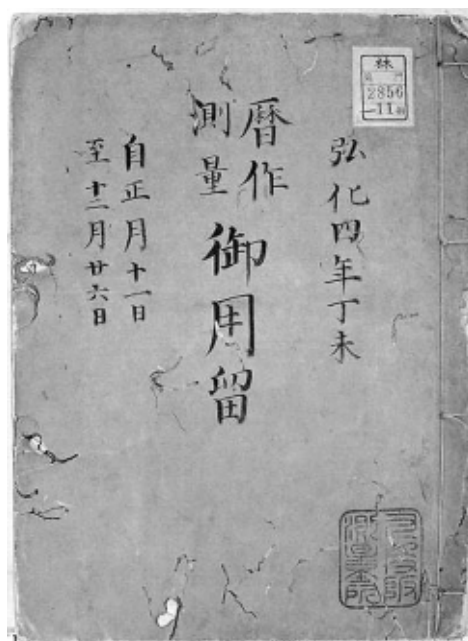


図7 『暦作測量御用留』

表紙に捺された黒印(図8)によって、本資料が天文方の観測所兼役宅であった「九段坂測量所」に存在していたものであることが分かります。その内容は、弘化四(1847)年から文久三(1863)年の間に天文方が執り行った重要な業務記録を再編・収録したもので(ただし欠年あり)、当時彼らを取り交わした文書・書翰の実物も数多く貼付されています。本資料に記された情報を読み解くことによって、当時の執務形態や情報伝達の過程を窺い知ることができることから、幕末期の天文方の動向を追求する上で、欠かすことのできない基本資料です。



図8 「九段坂測量所」



図9 a 『仏国曆象編』

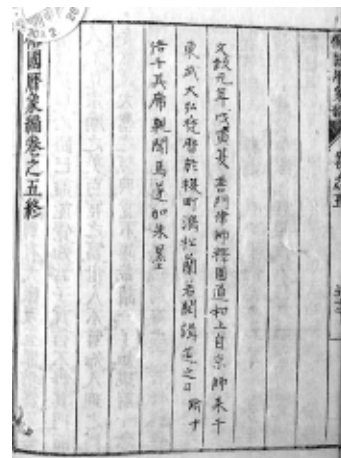


図9 b 『仏国曆象編』

4. 梵曆運動

江戸後期から明治初期にかけての日本では、仏僧たちが天文暦学に関する書物を次々と出版し、西洋流の天文学を激しく攻撃するという、興味深い運動がおこっています。「梵曆運動」と呼ばれるこの運動は、天台宗の僧侶である釈円通(1754 - 1834)によって広められたもので、仏典中に出てくる「須弥山」が実在するという前提の元に、西洋天文学の諸前提(地動説など)を否定し、仏典の記述と矛盾しない天文暦学を新たに構築しようとする試みでした。

円通は、この仏教天文学を弘めるために各地を講義してまわったことが知られていますが、その講義を受講した人物によるものと見られる書込みを残す資料があります。円通が著した『仏国曆象編』は、東北大学に計四点収蔵されていますが、林文庫本の末尾に付された奥書には、「文政元(1818)年の夏、釈円通和上が京都から江戸に來られて、大いに梵曆を広められた。榎町の濟松寺において講義を始められた。私、踰十はそれに臨席してじきじきに教えを聞き、そうして朱墨の書込みを加えた」とあり、本編の各所には確かに詳細な書込みが付されています(図9)。

また藤原文庫本にも、林文庫本とほとんど同様の書込みが付されていますので、こちらも円通の講義受講者が付した書込みであるか、それ

に類するものであると考えられます。この種の書込みが付された刊本は、全国的に見てもめずらしく、いずれも梵曆運動の実態を窺い知る上で重要な情報源です。

5. おわりに

以上、江戸時代の天文暦学関連資料をいくつか紹介しましたが、東北大学にはまだまだ多くの貴重な資料が国内外の研究者に知られないまま眠っていると考えられます。今後の電子化作業によって、その情報が広く公開され、幅広く活用されることを願ってやみません。最後に、資料調査にご協力いただきました、東北大学附属図書館に感謝申し上げます。

(ひらおか・りゅうじ)

全学教育科目「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」を開講

平成16年度後期から、全学教育科目「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」が開講しました。科目の設置は今泉隆雄図書館副館長（大学院文学研究科）の提案によるもので、ほかに4名の教員の連携により実施されています。初めての授業内容にもかかわらず多くの学生の関心を集め、今期の履修者は109名となっています。

この科目の目的は、大学生として卒業論文やレポート作成時に必要とされる、各種図書館ツールを利用した「情報探索能力」と、収集した資料や情報を活用した「レポート作成能力」を、体系的に習得することであり、次のページのような授業内容・構成となっています。

履修者はまず、学習・研究における情報探索の必要性を理解し、情報探索に関する基本的な知識や情報探索で使用する各種ツールの使用方法を習得することができます。次に、情報探索により収集した資料や情報を素材として利用して、人に読んでもらえるような内容の魅力的なレポートを作成する技術を習得することができます。



マルチメディア演習室での授業風景

情報探索術の授業では、図書館が執筆・編集したマニュアル『東北大学生のための情報探索

の基礎知識・基本編2004』を基本教材として使っています。また、授業は一方的な講義とはせず、情報シナジーセンターのマルチメディア演習室で実際の情報探索ツールを利用しながら知識の理解を深めるという、体験型の授業内容となっていることが大きな特色です。特に、オンライン辞書・事典を使った授業は、国内の大規模大学では初めての試みとして提供元からも注目されました。これらの実習時間では、多くの図書館職員が学生に対してアドバイスを行うなど、図書館職員が教育の現場で学習支援の役割を果たせたことも大きな意義でありました。

また、レポート作成術の授業では、若手研究者の執筆指南書として好評な、『これから論文を書く若者のために』の著者である酒井聡樹助教授（大学院生命科学研究科）を中心に授業を進めており、この講義内容もこの科目の大きな魅力となっています。

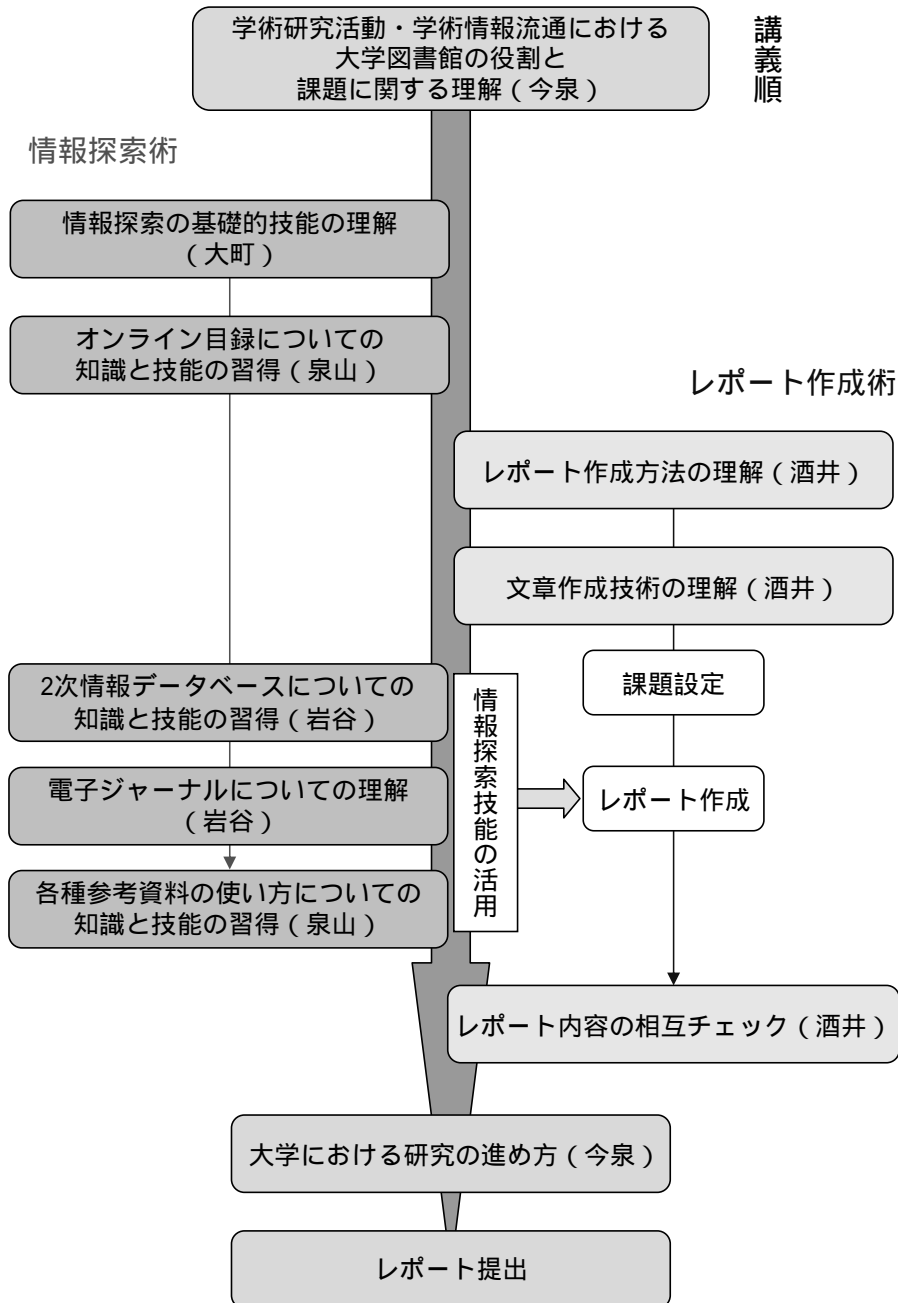
学生の基礎的な学習能力の向上を目的とするこの科目は、平成17年度も継続して開講される予定です。

担当教員一覧

今泉 隆雄（文学研究科，教授）
大町真一郎（工学研究科，助教授）
酒井 聡樹（生命科学研究科，助教授）
岩谷 幸雄（電気通信研究所，助教授）
泉山 靖人（教育情報学研究部，助手）

（総務課）

授業全体の内容・構成（関連図）



漱石・絵葉書・水彩画

情報管理課受入係 木戸 浦 豊 和

1. 夏目漱石の水彩画絵葉書

葉書を書く機会がほとんどないという人でも、年に一度の年賀状を通じて、絵葉書を贈ること、贈られることの楽しみを知っているのではないのでしょうか。贈る相手のことを思い浮かべながら色とりどりの絵葉書を選ぶ時間はなかなか楽しいひとときですし、パソコンなどを使って好みの絵柄をデザインするのもまた楽しい経験でしょう。贈り主の個性をそれぞれに反映した絵葉書が届くのも大きな喜びに違いありません。

夏目漱石もまた絵葉書を描くことに楽しみや喜びを見出していた一人でした。漱石は、イギリス留学から帰国後の明治37年から38年にかけて橋口貢や寺田寅彦(注1)など、友人や知人に宛てて盛んに自筆の水彩画絵葉書を送っています(注2)。風景や人物を描いたもの、あるいはフランソワ・ミレーやブランギンなどの作品を模写したもの、これらの多くの絵葉書からは、漱石が楽しんで絵を描き、絵の世界で自在に遊んでいた様子が伝わってきます。

本館の漱石文庫の中にも、漱石が土井晩翠に宛てて描いた自画像入りの絵葉書があります(明治38年2月2日)。「自分の肖像をかいたらこんなものが出来た何だか影が薄い肺病患者の様だ」と、漱石は謙遜の言葉を書き付けていますが、「上の方へ引つ張り上げ」られた「八の字の尾に逆か立ちを命じた様な」(注3)カイゼル髭などは、当時の漱石の容貌をなかなか巧みに写しとっているのではないのでしょうか。また、オックスフォード大学モードリアンカレッジの水彩画は葉書サイズの紙に描かれており、絵葉書かみやげ絵などを見て模写したものではないかと推測されています(注4)。あるいはこの絵も絵葉書として誰かに贈るつもりがあったのかもしれない。

しかし、一見楽しげに見える漱石の絵葉書も、実際にはそれらを描いた当時の心境は必ずしも穏やかなものであったとは言い難いようです。鏡子夫人は、漱石がイギリス留学から帰国した直後の「一番頭の悪」い状態の時に、盛んに絵葉書を描いていたと回想しています(注5)。イギリス留学中から「神経衰弱」に悩まされ続けていた漱石は、絵葉書を描くことに不安な心のはけ口を求めていたのでしょうか。

2. 水彩画の流行

「生涯にわたって絵好きで、みずから絵をかき、絵で考え、絵で息をした」(注6)と言われるほど、漱石は、絵画に親しみ、小説や評論の中でもしばしば美術作品に言及しました。

漱石はイギリス留学中の明治34年(1901)1月29日の日記に、「帰途 Water Colour Exhibitionヲ見ル画題筆法油画ヨリモ我嗜好ニ投ズル者頗ル多シ日本画ニ近キ故カ日本ノ水彩画杯八遠ク及バズ」と記し、水彩画への好みを示していますが、漱石が明治37年から38年にかけて頻りに水彩画絵葉書を描き送ったのは、当時の流行も少なからず影響していたように思われます。というのは、画家の天下藤次郎が明治34年6月に水彩画の独習書『水彩画之彙』(新声社)を上梓すると、以後、三宅克巳『水彩画手引』(日本葉書会、明治38年12月)や丸山晚霞『水彩画法 女性と趣味』(日本葉書会、明治40年7月)など、水彩画の手引書が相次いで刊行され、水彩画は一種の流行として広く行われるようになっていたからです(注7)。

当時の水彩画の流行を伝えるものとして、例えば、天下藤次郎が明治38年7月に創刊した水彩画専門雑誌『みづゑ』第51号(明治42年6月)の投稿欄には、宇都宮在住の長澤北斗という一読者から、「一にも水彩画、二にも水彩画、近

年の水彩画流行は実に驚くべきで、「水彩画を知らない人は話せない世の中とはなつた」、「一寸外に出ても屢々遭つてしかもよく目につくのは画架、三脚をかついである人である」という投書が寄せられています。また、明治36年8月発行の雑誌『日本美術』『美術界近時』には「文士の戯画」という記事があり、「此頃は文士間に於ける写真熱既に稍下火となりて、近来は更に水彩画具と画筆とを弄して、各々其悪画を自慢し居れる気焰家も少からず」と、水彩画に興じる文士たちを揶揄的に報じています。

このような水彩画の流行は、漱石の作品にも確実に反映しており、例えば『吾輩は猫である』では、「文士」である苦沙弥先生は、「ある月の月給日に」「水彩絵具と毛筆とワットマンという紙」を買い、「翌日から当分の間というものは毎日々々昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない」と語られています。そして水彩画熱にうかされ「夢の裡まで水彩画の未練を脊負つてあるいてい」（注8）た苦沙弥先生ですが、猫にまでからかわれる始末の画才のなさに見切りを付けたのか、結局、「吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩画において望のないことを悟つたものと見えて」「其代りに文章でもやろうと思」（注9）い立ちます。

また、『三四郎』ではよし子さんという女学生が庭の風景を写生し、結局「あまり水が多過ぎたのと、筆の使い方がなかなか不慣なので」思ふような色を出せず、「もう駄目ね」（注10）などと嘆息したりする姿が描かれています。

そして水彩画に熱中する漱石もまた、「何しろ訪客だ、原稿だ、学校の仕事だといふので、水彩画なんかやつてる閑がなくな」り、「どうも性質が能くないといふのだし、自分も少々呆れ返つたから廃したよ」と語っています。しかし、漱石には水彩画に対する未練が残っていたのでしょうか、知人に画帖を贈ると漱石の水彩画を「ちやんと額にして恭しく掛けて」といいます。それを見ると、「こんな事なら廃め

ないでもよからうかと、我ながら感心したよ」（注11）とも述べています。

3. 絵葉書の流行

苦沙弥先生もよしさんもワットマン紙を用いて本格的に水彩画に取り組んでいますが、水彩画の独習書の中では絵葉書を描くことは「高尚なる楽しみ」（注12）や「文字以上の趣味を領ち伝える」（注13）ものとして奨励されていました。水彩画家が描いた風景絵葉書も人気を博し、水彩画と絵葉書は相乗して流行を呈していったのです。

絵葉書の流行は、明治33年（1900）10月に郵便法が改正され私製の葉書の使用が認められたことによってその端緒が開かれ、明治35年（1902）6月の万国郵便連合加盟25周年を記念するはじめての官製記念絵葉書の発行、さらには、明治38年（1905）から明治39年にかけて数度にわたる日露戦争戦勝記念絵葉書の発売によって、空前のブームとなりました（注14）。

このような絵葉書の流行について、例えば石井研堂は、「記念絵葉書熱の旺盛を極めし三十八年十二月ごろは、之を買ひ受けんとする者に、傷者を生じ、市上の価格も、十数円にて取引せらるゝに至る」（注15）と記し、また生方敏郎は、「とにかく三枚一組の戦捷記念絵葉書の景気は素晴らしいもので、郵便局へ早く買いに行かないと、じきに売れてしまう。熱心な連中は、明日売り出すことが知れると、まだ夜の明けない中からおしかけて、郵便局の事務の始まるのを待つという騒ぎだ。誇張でなく江戸橋の郵便局では、押すな押すなと推しかけた群衆の中に、窒息して死んだ少年が二人までもあった」（注16）などと述べています。また、明治38年6月10日発行の雑誌『風俗画報』第318号には、「絵葉書の流行」として、「絵葉書の流行は昨今其極点に達したり、市内の各勸工場に二軒三軒の葉書店の出で居らぬ所はなく、絵葉書専門の小売店も到る所に見受けらるゝ」という記事も見られます。イギリス留学中の漱石も、鏡子夫人の妹

の鈴木時子夫妻から「二十円許り絵葉書を買つてよこせと」頼まれ、「時さんは不相変御大名だよ」(明治34年5月8日夏目鏡宛書簡)などと愚痴をこぼしたりもしています。ちなみに明治40年(1907)の公務員の初任給が50円だったことを考えると、20円分の絵葉書というのはかなりの高額であったと言えます。

当時は、「事件絵葉書」と呼ばれる、洪水や震災、戦争などを写した極めて時事性の高い絵葉書が多く発行され、他方では、芸妓などをモデルとした「美人絵葉書」も大変人気があったようです。明治38年5月20日発行の『東京経済雑誌』第1286号の「青白油湖」には「今の流行」として、「絵八ガキ、専門の雑誌が四種も出版さるゝ事となれり、軍人の顔と軍艦の図などは売れなくなりて、美人の図尤も売口よし」とあります。

この記事に見られるように『ハガキ文学』(日本葉書会、明治37年10月創刊)や『はがき新誌』(便利堂、明治38年3月創刊)といった絵葉書に関する雑誌が刊行されたり、宮武外骨による『滑稽新聞』の定期増刊として『絵葉書世界』(第1集～第26集、明治40年5月～明治42年6月)が出版されたり、さらには雑誌の付録として絵葉書が添付されることもありました。漱石文庫の中にも雑誌『新小説』の付録絵葉書が4枚収められています(注17)。

しかし明治43年頃になると、絵葉書の流行も下火を迎えたようです。明治43年4月5日発行の『風俗画報』第407号「雑纂」欄の「記念絵葉書目録」には、「記念の為め発行せし絵はがきは、^{ママ}盛りに流行せし際は、世人争ふて之を購ひ居たるが。^{ママ}いつしか漸次冷淡になりたり」とあります。

4. 狩野亨吉の絵葉書コレクション

漱石の友人であり稀代の収集家でもあった狩野亨吉の狩野文庫には1万2000枚あまりの絵葉書コレクションが含まれています。

本館では「学術情報ポータル」により「狩野

文庫絵葉書コレクション」のデータベースを公開しており、現在まで整理が完了し閲覧可能な約4000枚の絵葉書のデータを検索することが可能です(注18)。「狩野文庫絵葉書コレクション」は、日本各地の名所絵葉書が大部を占めますが、中には、美人絵葉書や戦役記念絵葉書、美術絵葉書、外国の風景や風俗などを写したものなども収められています。これらの絵葉書のごく一端は、宮城県の風景絵葉書を中心に、平成11年度の企画展および第11回常設展で公開しました(注19)。新たに整理が完了した分についても展示会などを開催し広く公開することを検討しています。

「江戸学の宝庫」として著名な狩野文庫ですが、今後は、明治から昭和初期にかけての日本の風景や社会、風俗を写した貴重な史料として「狩野文庫絵葉書コレクション」がより一層活用されることを期待しています。

注

1. 橋口貢は漱石との絵葉書の交換について次のように回想している。「あれは明治三十六年春、英国留学から帰朝された頃と憶えてゐるが、その頃夏目先生は本職の大学講師の余暇に、盛んに水彩画を画いてをられた。之は洋行中ロンドンで洋画の大家浅井忠氏と知り合ひになつたり、又芸術雑誌スチュディオのエキストラ、ナンバー「ウォーター、カラー」などを持ち帰られたが、それを見たりして、刺激を受けられた結果と思ふが、盛んに水彩画を画ひて、水彩画絵葉書などを私のところへ送つてよこされた。当時私も水彩画を画いてみたので、それに対して、やはり水彩画絵葉書を書いて送り、互ひに交換したものである。ところが、夏目先生の絵葉書たるや、私製のもので寸法がいゝ加減なものだつたので、葉書の規定の寸法に相違し、屢々不足税をとられた。それで行き合つた時、「毎々絵葉書を送つて貰つて有り難いが、時々不足税をとられるのは閉口するよ」と話したら、「さうか、それはちつとも知らなかつた、どうもすまないことをした」と云つて、笑つたことがある」(「夏目先生の画と書」『漱石全集月報』第11号、岩波書店、1929.1)。また、寺田寅彦は、「先生がどこから少しばかりの原稿料を貰つた時に、早速それで水彩絵具一組とスケッチ帖と象牙のブックナイフを買つて来たのを見せら

- れてたいそううれしそうに見えた」(『夏目漱石先生の追憶』『寺田寅彦全集』第一巻, 岩波書店, 1996.12)と述べている。
2. 漱石の描いた絵葉書は、『夏目漱石遺墨集』第四巻絵画篇(求龍堂, 1980.1), 『漱石全集』第二十二巻(岩波書店, 1996.3)などで確認できる。
 3. 「吾輩は猫である」九(『漱石全集』第一巻, 岩波書店, 1993.12)
 4. 『夏目漱石遺墨集』第三巻絵画篇, 求龍堂, 1979.7
 5. 夏目鏡子述・松岡讓筆録『漱石の思ひ出』岩波書店, 1929.10
 6. 芳賀徹「夏目漱石 - 絵画の領分」(『夏目漱石遺墨集』第三巻, 前出)
 7. 大下藤次郎は『水彩画之栞』の序文の中で水彩画の効用の一つとして自然を愛する心の涵養を挙げているが、このような水彩画の流行は、日清戦争直後の明治27年10月に刊行された志賀重昂の『日本風景論』のベストセラーに代表されるような、当時の日本人の「風景」に対する関心とも深く関わっていたとの指摘がある(佐々木静一「大下藤次郎と水彩画の時代 - 『みづゑ』発刊のころ」『みづゑ』第900号, 1980.3)。
 8. 「吾輩は猫である」一(前出)
 9. 「吾輩は猫である」二(前出)
 10. 「三四郎」五(『漱石全集』第五巻, 岩波書店, 1994.4)。なお、中島国彦は、「藁屋根・効外・水彩画 - 『三四郎』の一節から」(熊坂敦子編『迷羊のゆくえ - 漱石と近代』翰林書房, 1996.6)において、よし子の描く水彩画に分析を加えている。
 11. 「漱石一夕話」(『漱石全集』第二十五巻, 岩波書店, 1996.5)
 12. 大下藤次郎「水彩画之栞」(福田徳樹編『大下藤次郎美術論集』美術出版社, 1988.4)
 13. 丸山晚霞『水彩画法 女性と趣味』日本葉書会, 1907.7
 14. 絵葉書の歴史については、佐藤健二『風景の生産・風景の解放 - メディアのアルケオロジー』(講談社, 1994.2)や、田邊幹「メディアとしての絵葉書」(『新潟県立歴史博物館研究紀要』第3号, 2002.3)を参照した。
 15. 石井研堂『改訂増補 明治事物起源』下巻, 春陽堂, 1944.11
 16. 生方敏郎『明治・大正見聞史』中公文庫, 1978.10
 17. 漱石文庫に収められている4枚の絵葉書のうち2枚は、太田鯉汀「埃及土産」であり、『新小説』第9年第6巻(明治37年6月)に掲載されている。他の2枚の掲載号については未確認。
 18. <http://www2.library.tohoku.ac.jp/>

19. <http://www.library.tohoku.ac.jp/main/exhibit/gen/postcard1.html>

参考文献

- 森銑三『明治東京逸聞史』1・2, 平凡社, 1969
 匠秀夫『近代日本の美術と文学 - 明治大正昭和の挿絵』木耳社, 1979.11
 土居次義『水彩画家 大下藤次郎』美術出版社, 1981.7
 三宅克巳「思い出づるまま」(『日本人の自伝』19, 平凡社, 1982.4)

引用にあたっては、旧字を新字にあらため、ルビを省略した部分があります。



漱石 土井晩翠宛絵葉書



漱石 モードリアンカレッジ水彩画



狩野亨吉 漱石宛絵葉書（兼六公園千歳台）
（明治39年7月24日消印）



（仙台名所）市街の一部（年代不明）
狩野文庫絵葉書コレクション



仙台停車場（年代不明）
狩野文庫絵葉書コレクション



（ハリ－彗星絵葉書）
明治四十三年五月二十九日見取図
狩野文庫絵葉書コレクション



（大正三年十一月十一日）東京市主催 青島陥落祝賀会の光景
狩野文庫絵葉書コレクション



(年賀絵葉書)橋本邦助画 豊年(年代不明)
狩野文庫絵葉書コレクション



(年賀絵葉書)一条成美画 御慶(年代不明)
狩野文庫絵葉書コレクション

(きどうら・とよかず)

平成16年度 東北大学附属図書館企画展

「江戸の数学 - いま、和算がおもしろい! - 」開催報告

平成16年10月29日(金)から11月7日(日)まで、「江戸の数学」展を開催しました。

展示品等の詳細は前号で詳しく紹介しましたので、今回は記念イベントとして10月31日(日)に開催したシンポジウムと講演会の内容に、来場者からのアンケート結果を加え報告します。



開会式でのテープカット(中央は和田仙台市科学館館長)

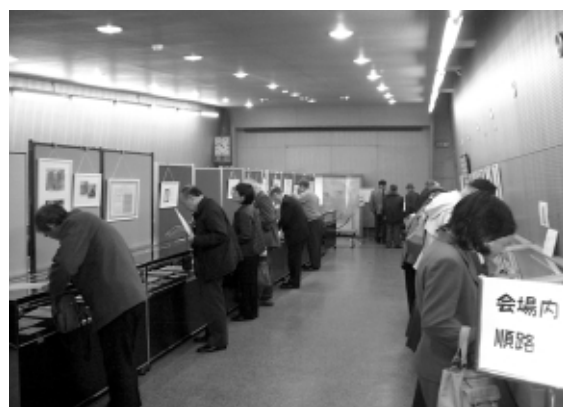
「記念シンポジウム」

記念シンポジウムは、「和算と現代：現代における和算再興の取組み」をテーマに午前中に開催しました。当日は、上天気とは言い難い天候だったにもかかわらず、多くの、そして遠方からの来場者を得ました。まず基調講演として、本学名誉教授土倉保氏より、本学における和算の研究活動、所蔵している貴重資料などの紹介や東北地方における和算の興隆などについて概説をいただきました。来場者は和算関係者が多いこともあって、真剣にメモなど取りながら聴講する姿が見受けられました。

引き続き、近隣の機関による和算関連の取り組みについて事例報告をいただきました。まず最初は、「22世紀を牽引する叡智の杜事業」に取り組んでいる宮城県図書館の早坂氏より報告がありました。宮城県図書館は、仙台藩関連の貴重な資料を数多く所蔵していますが、中でも

和算に関して一級の資料である『関算四伝書』の収蔵に至るまでの経緯などを説明いただきました。また、この事業の中で行っている貴重資料の保存修復や電子化などに関する興味深い報告もいただきました。

次に、和算に関して常設展示を行っている一関市博物館の相馬氏より報告いただきました。一関は著名な和算家である千葉胤秀を生んだ、もともと和算の盛んな土地柄で、全国に残る「算額」の現存数においても日本一を誇っています。現在でも在野の和算研究家が多く、一関市博物館とともに活発な活動をしています。実際に千葉の著した『算法新書』を読む会を主催したり、小学生なども挑戦できる和算問題を作成したりと多様な活動を行っています。



一関市民の団体見学

引き続き報告があった宮城県第一女子高等学校は、スーパーサイエンスハイスクールに指定されています。同校の伊藤教諭から、生徒が取り組んだ和算学習についての報告がありました。高校生という若い世代が和算をどう捉え、どの程度興味を持って学習してもらえたのかを、生徒自身が作成したプレゼン資料を示しながら発表が行われ、貴重な取り組み例の報告となりました。

「江戸のモノづくり」研究班からは、電気通

信大学の佐藤氏が報告しました。このプロジェクト自体は非常に広い分野を対象とした巨大なものです。その中で和算研究の位置付けや、全国を調査しての経験談など俯瞰的な視点からのお話を伺うことができました。

東北大学附属図書館からは、林鶴一先生をはじめとする歴代の教授の和算関連コレクションの紹介や、最近公開された「和算ポータル」の取り組みが紹介されました。和算ポータルのサイトでは、資料を画像で閲覧することができるので、全国各地の和算研究者にとって格好の研究材料となる可能性があります。

「記念講演会」

同日午後からは、記念講演会として和算の第一人者お二人による講演が行われました。一人目は、午前中も事例報告いただいた「江戸のモノづくり」研究班の佐藤氏より「江戸の社会に生きた和算家たち」と題して講演いただきました。和算家が活躍した背景にはどんな歴史的背景があったのか、実際の和算家たちはどのように暮らしていたのかなど、広い観点からの解説がありました。

和算家として現代では一番有名な関孝和は、当時は弟子の建部より役人としては出世しなかったこと、人々が神社に揃って算額を収めた時代は、伊勢参りなど旅行がブームで、神社は人目につく場所として非常に効果的だったことが語られました。当時のホームページのような役割を果たしていたという表現もあり、江戸の情報流通の一端も垣間見ることができました。さらに当時パリで開催された万国博覧会に千葉の『算法新書』が出品されていたとのことで、和算が日本の学問力をアピールする格好の材料だったこともわかりました。

二人目は、東北大学工学部出身で、現在は本業のエンジニアをしながら和算をテーマとした作品を手がけている、作家の鳴海風氏からご講

演いただきました。テーマは「和算と測量：幕末の和算家小野友五郎の生涯」です。仕事をする傍ら、休日を使って和算ゆかりの地を訪ね歩き、そこに生きた和算家たちがどのような気持ちで仕事に臨んだか、また、家族とのつながりはどのようなものであったかなど、人間としての和算家たちの生き方を想像する楽しみなど、作家ならではの視点でお話いただきました。また、和算家は当時の技術者として働いていた場合も多く、同じく現代でエンジニアとして働く自分と重ね合わせた感慨なども語られました。会場では、小野友五郎のご子孫も聴講されており、講演の最後に鳴海氏より紹介があった際には、会場全体が驚きに包まれました。



鳴海氏の講演

お二人の講演後には、会場から次々に質問が寄せられ、予定時間をかなり超過するほどの盛り上がりを見せました。

この日は、和算に関して、研究者、作家、資料を保存・提供する機関、展示をする機関、教育に利用する機関などの方々に加え、全国各地で和算を研究している方々が一堂に会する機会を設けることができ、今後の和算をめぐる活動の中で、非常に重要な場を提供できたのではないかと思います。

展示期間内にはこのほかに、図書館員による展示解説を行い、和算研究者の方以外も展示を

十分楽しめるよう工夫しました。

展示そのものも、資料だけでなく、各種のパネルや、手にとって体験できるパズルなどを配置し来場者から好評を得ました。

今回の企画展全体を通じて、当館の資料紹介にとどまらず、近隣地域での活動発表や、和算というテーマでつながっている研究者同士の出会いの場を設けることができ、東北大学としての社会貢献の一端を担うことができたのではないかと思います。



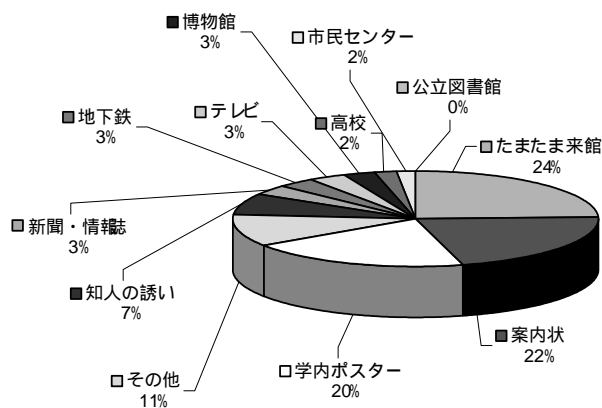
図書館員による展示解説

アンケート集計結果報告

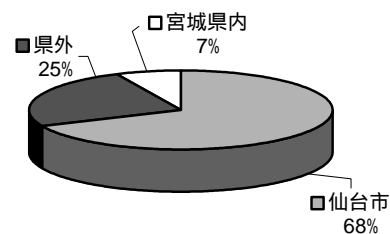
- ・ 展示会場入場者数：554名
 - ・ アンケート回収枚数：243枚
- 回収率：44%

- ・ 記念シンポジウム来場者：73名
- ・ 記念講演会来場者：84名

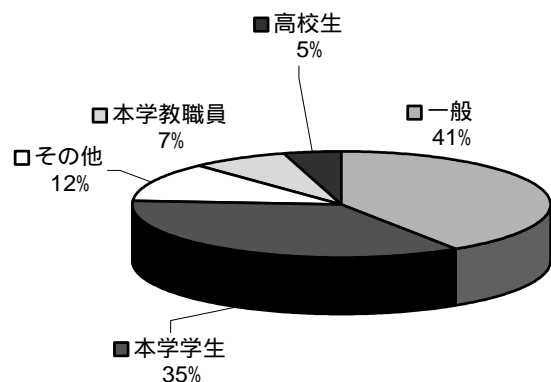
(1) この企画展をどこで知りましたか？



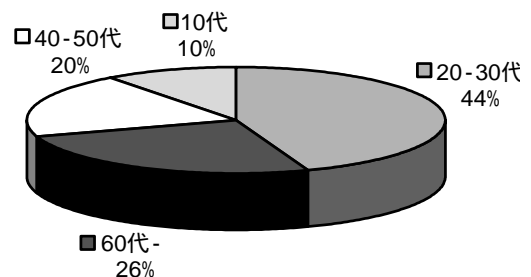
(2) お住まいは？



(3) ご所属は？



(4) ご年齢は？



(5) この展示会で、面白いと思った資料や解説があれば教えてください。

- 各種の挑戦問題（解答が裏面にあるのが良い）・パズル 多数
- DVD解説（数学手引歌，算木）
多数
- 貴重な原本やそのオンデマンド出版計画（複製を実際に手にとって見ることができるのが良い）
- 林鶴一先生関連資料
- 鳴海風先生の著作の紹介（鳴海先生についてまとめた資料が知りたい）
- 東北地方の和算の興隆，レベルの高さに感心した
- 解説がとてもわかりやすい，解説がもっとほしい

(6) その他，ご意見，展示会へのご要望などがあればお教えてください。

良かった点

- ・ 質量ともレベルの高い展示だった 多数
- ・ シンポジウム・講演会と合わせてみることでできて大変良かった
- ・ 小中学校のテキストに活用できないかと思った
- ・ 解説がよくできていて素晴らしい
- ・ 図書館員の説明も丁寧，親切でわかりやすい
- ・ 学園祭との同時開催は非常によい

工夫すべき点

- ◆ 漢文が難解なので現代語訳をつけてほしい
多数

要望

- 東北大学で「和算史シンポジウム」なるもの

のを毎年開催し，様々な立場の方々が発表する場を設けてほしい

- 今回のように，展示の他，遊び心・興味をひく展示をアイデアを使って企画してほしい
- 東北大所蔵の「宝物」を魅力あるテーマで展示する企画を続けてほしい
- 展示会の期間はもっと長いほうがよい
- 常に展示しておいてほしい
- 宣伝に力を入れたほうがよい
- 子供たちにも楽しめるように工夫してほしい

（企画展 WG 事務局 閲覧第二係）

第36回国連寄託図書館会議に出席して

参考調査係 吉 植 庄 栄

平成16年9月16日から9月17日にかけて第36回国連寄託図書館会議が、東京渋谷のUNハウスにて行われました。その会議に出席しましたので、報告します。

まず国連寄託図書館会議という大仰な名称から、出張が決まった時から当日を迎えるまで恐怖と緊張感に長く支配されました。また国連資料と出会ってから未だ一年も経って無い事と、後ほど示す事情からも、「自分が出席して大丈夫なのだろうか?」「会議」って言う位だから何か国際問題でも討議するのだろうか……。それも英語か!?!という不安感にとてもさいなまれました。しかし、実際に出席してみると会議というよりは講習会+勉強会でおまけに余興までありました。以下、会議当日の見聞と気になった点、加えてテーマに即した発表を課されたのでそれらを報告します。

なおこの国連寄託図書館会議は、以前は会場を寄託図書館の持ち回りで開催していたのですが、会場となる寄託図書館の負担が大きいということで、毎年渋谷の国連広報センターで開催される事になりました。



国連寄託図書館職員の皆様

寄託図書館会議の流れ

(初日の主な内容)

- ・挨拶と講演「国連と平和」
国連広報センター所長：野村彰男氏
- ・各館の活動報告
- ・講演「PKOと国連資料」
帝京大学助教授：則武輝幸先生
- ・国連広報センター見学案内
- ・講義「国連文書の基礎知識」
- ・人形劇
- ・国連統計/データ紹介

初日の内容で印象に残ったのは、各館の活動報告と講義「国連文書の基礎知識」、加えて人形劇でした。

各館の活動報告では、各国連寄託図書館の運営状況の報告ですが、全体的に国立大学系は、少ない人数で人事異動も早い中、何とか運営しているという報告が多く、逆に私立大学は、発足当時から同じ人が運営しているという機関もありレファレンス件数も多いという事から、同じ日本国内でも大学の運営方針や、構成学部により運営が全く異なる事を知りました。

またこの国連寄託図書館には、国立国会図書館、外務省、及び数館の公共図書館も参加しており、これもまた運営環境が異なるので非常に勉強になりました。

講義「国連文書の基礎知識」では、国連文書について初心者でも分かる様に説明して頂き、自分の様な担当して日が浅い職員にはためになる講義でした。(一方、前述した担当者の異動がない私大図書館の方は退屈だったでしょうが。)

人形劇については唐突な感じがしますが、渋谷のUNハウスには、ライブラリー¹(図書館)があります。そこでは子供向けの「ライブラリー見学・絵本読書会」を行っており、その時に職員の方々が「人形劇」の公演をするそうです。その劇では、国際連合というものを子供向けに分かり易く理解してもらえるように公演するそうです。今回も普段と変わらず公演していただいたので、童心に戻って劇を楽しみました。見ている方は笑っていればいいのですが、公演を行う方は結構ハードな練習をするらしく、この辺りでも国連広報センターの方々の熱意を感じました。



国連寄託図書館会議の様子

(2日目の主な内容)

- ・ライブラリー見学
- ・オンラインツール・ガイド
(UN-I-QUE, UNBISNET, ODS)
- ・国連ウェブサイト/ウラワザ情報
- ・テーマ別レファレンス事例報告

国立国会図書館, 京都国連寄託図書館
西南学院大学図書館, 東北大学附属図書館,
中央大学図書館

翌日は、朝からライブラリー(図書館)の見学会でした。ここで印象に残った事は、分かっている事とはいえ、国連文書が所狭しと所蔵されていることで、またその所蔵も整然としたも

のでした。よく当館に他大学から国連文書の所蔵調査を受けるのですが、国連文書全てを当館は所蔵しておる訳ではないので、謝絶する事も多々あります。しかしこちらのライブラリーを紹介することで、そういった事例も救う事ができるのではないかと思います。次に驚いたのは、レファレンスカウンターに座っている職員が、職員ではなくボランティアの方だという事です。この件については後述します。

続いて印象に残ったのは、オンラインツール・ガイドです。現在国連の文書を探す有効なツールとして、UN-I-QUE², UNBISNET³, ODS⁴の3種があります。当館の環境では、UN-I-QUEとUNBISNETが利用できますが、オンラインでの資料調査ができて便利です。しかしコツが分からないと有効な検索ができません。そういう意味で今回この講義も大変役に立ちました。

午後のスケジュールは、事前に国連広報センターから依頼を受けた各図書館からのテーマ別レファレンス発表の時間でした。これは、与えられたテーマに即して、実際に国連文書を使う立場になり、各ツールを駆使して国連の動きをまとめ、尚かつ参考になる情報源を報告するという企画でした。かくいう自分も「イラク」と

1 2002年4月、国連広報センターは所蔵の国連資料を国連大学ライブラリーに移動、統合し、UNドキュメンテーションサービス(UNDS)を開設。以来、同ライブラリーとの共同運営の下、国連資料の収集、整備、公開、参考調査業務を行っています。同サービスでは、資料検索ガイダンス(日英)、様々なライブラリー見学会、文書展示など、数多くの企画を実施し、国連資料の幅広い普及と情報発信的なライブラリーサービスに務めています。(http://www.unic.or.jp/un-ds/index.html)より。

2 UN-I-QUE: UN Information Quest
(http://lib-unique.un.org/lib/unique.nsf)
1947年から現在までの、国連文書のドキュメント記号、セールスナンバーが検索できるデータベース。

3 UNBISNET: UN Bibliographic Information System
(http://unbisnet.un.org/)
国連ダグハマーショルドライブラリーと国連ジュネーブ図書館に受け入れられた各種国連資料を検索できるデータベース。

4 ODS: Official documents of the United Nations
(http://www.ods.un.org)
国連文書が保管されているデータベース。本文を読むことができる。利用登録が必要で有料。当館は、契約しておりませんが近日中に無償公開する予定とのこと。

いうテーマで発表を依頼され、国連初心者の方にとっては、不安につつまれながら何とか発表ができました。発表については「付録」として報告の最後に付けておきます。

全体の所感

以上全体の流れでしたが、特に報告したい事を2つ以下にまとめたいと思います。

ボランティアの活用

前述したようにライブラリーのレファレンスは、ボランティアの方が行っているのに非常に驚きました。詳しく訊ねるとボランティアの方々は、レファレンスのみならず今回の国連寄託図書館会議の様なイベントの運営にも積極的にかかわり、業務の中核を担っていました。ライブラリーのホームページ

(<http://www.unic.or.jp/un-ds/volunteer/volunteer.htm>)によると

「(業務)内容はUNライブラリーのカウンター業務、電話対応、レファレンス・サービス、リサーチ、国連資料検索ガイダンスや統計ナビ、見学案内、体験図書館員、探検ツアー、絵本朗読、翻訳、国連寄託図書館会議などの手伝いです。」とあります。これでは普通の図書館員、特に自分が所属している参考調査係の仕事とほとんど同じと思えます。これほどの業務を無給で行う事を、本人達がどう考えているか非常に興味があったので、業務内容の事実を知った後こっそり聞いてみると「毎日が非常に充実していて楽しい。」との事でした。また、一体どの様な人がボランティアになって仕事をしているか聞いてみると、休暇期間中の学生や会社を辞めた社会人が中心とのことです。

自分は図書館とボランティアという事であれば、貸出・返却作業や書架整理、配架作業を中心にボランティアに協力してもらうものだという先入観がありました。この事例はこの先入観を壊してしまうきっかけになり、やはり人間と

いうものは自らが興味関心を持つことを調査するという事は、それが例え無償であっても大いに没頭するという事を、非常に痛感する機会となりました。本学には、研究熱心な学生・院生をはじめとした構成員が多数所属しています。もし、本学に上記の様な事を当てはめるとすると、調査・研究に熱心な人間を集めて「図書館クラブ」みたいなものを立ち上げ、図書館に集まってくる調査依頼などの図書館業務に協力してもらう様な感じといった所でしょうか。現状でも定員削減で厳しい職場環境に、熱意のある方々の応援が入れば職場としても助かりますし、一方学生が実際に図書館という職場で、仕事を手伝う事によって、より深く自分の知識を深めることができ、図書館の奥深さを知ることができるのではないかと密かに思っています。



ボランティアの皆さん

出張講習会について

ライブラリーのホームページには、「資料ガイダンスを出前」という記事

(http://www.unic.or.jp/un-ds/info/refer_06.htm)があり、参考調査係に赴任してから長く気になっていました。というのは国連資料の取り扱いについて、機会もないので中々初心者の域を脱しないので、もし、国連広報センターの方が仙台まで出向いてくれて、国連資料の事について教えていただく機会があればと考えていたからです。今回の寄託図書館会議の発表準備

と会議開催中の講義で初歩はかなり学ぶことができましたが、自分が聞いただけでは、他の担当者や国連資料が必要な利用者にその内容を伝えるのに自信がありません。ということで、「資料ガイダンスを出前」という出張講習会についてこの機会に国連広報センターの方に尋ねると、「全国どこにでも参ります。但し旅費が持たないので、招待館が持って下さい。」とのことでした。

国連寄託図書館に当館が加盟しているとはいえ、本学関係学部の教職員・院生・学生をはじめ、当館図書館員ですら国連文書についてしっかり把握している人は非常に少ないのではないのでしょうか。中には当館の所蔵状況を知らない人や、所蔵している事を知っていても探し方・利用の仕方が分からない人が多くいると思います。実際レファレンスカウンターで対応する方に、そういった方が時々いらっしゃいます。何かの機会に、この「資料ガイダンスを出前」が実現すれば、メリットは大きいと思います。

終わりに

上記の様な印象をもった国連寄託図書館会議でしたが、2日間非常に濃く勉強させて頂くだけでなく、「イラク」について発表したことから国連のみならず、イラクについても深く学ぶ機会を得ました。特に「何故、あれだけ混迷を深めるイラク情勢なのか？」ということを学んだのは、今後の自分にとって非常に糧となったと考えております。この機会を与えて下さった図書館の関係各位ならびに国連広報センターの千葉様、また会議の準備中及び出張の留守中に穴を埋めて頂いた参考調査係の皆様はこの紙面を借りてお礼申し上げます。

(テーマ別レファレンス報告：イラク)

イラク問題は、懸念された大量破壊兵器も発見されず、毎日テロや暴動の暗いニュースばかりで、肝心の国家と社会の復興については遅々として進んでいない感じすら受ける。何故このような状況に陥ったかの背景について、年表や最近の図書等をおさえながら、資料調査を行った。

1、「イラク問題」年表

・概略

オスマン＝トルコ帝国の属州であったメソポタミア地方の3州(バスラ州、バグダート州、モスル州)は、第一次世界大戦の最中、イギリスの攻撃を受け占領された。戦後、当地方では強硬な反英暴動が発生し、属領化を諦めたイギリスは、マホメットの直系を王に頂くイラク王国を成立させ、3州の間接統治を狙った。この歴史事実は、バスラ州＝シーア派イスラム教徒中心、バグダート州＝スンナ派イスラム教徒中心、モスル州＝クルド人多数居住という3州の宗教・民族差異を無視した政策で、後にイラクの政情不安定という禍根を残すのみならず、現在のアメリカによるイラク政策が同じ苦勞をし、尚かつ同じ終末点に向かっていると指摘する意見がある。⁵

治安が回復できない理由

湾岸戦争以来10年に渡る経済制裁により、国内物資は開戦時ですら底をついており、インフラ自体の機能が既に怪しかった。

また米軍の占領政策が非常に見通しの甘いもので、イラク国内のイスラム宗派及び民族対立の混迷さや、国内各地の武装組織、自警団組織を收拾する事ができていない。

おまけに米軍の捕虜・民間人虐待のスキャンダルや、占領当初治安業務を怠った事をイラク国民は、非常に失望し不信感を持っている。

5 この歴史的流れは、現在のイラクを巡る状況(占領軍に対する暴動による社会不安、アメリカ寄りの暫定統治機構の樹立など)と酷似していると阿部重夫氏は指摘している。(イラク建国：「不可能な国家」の原点/阿部重夫 中公新書 1744 p.152)

2, 「イラク」での国連活動

・概略

* 2003年 8月19日爆弾テロ事件

イラクの戦後復興業務を行っていたバグダッドの国連事務所にて、大規模な爆弾テロ発生。24人が死亡、108人負傷の大惨事となる。死亡者の中にはデメロ事務総長特別代表（Special Representative: Sergio Vieira de Mello）も含まれ、国連史上未曾有の事件となった。これをうけ、国連は2003年10月末に職員の国外退去を命令した。

何故、国連は狙われたのかについては、反米感情と結びつき国連も敵と見なされた事や、テロリストの狙いが、中立性の高い国連をイラク統治から撤退させ、アメリカ支配を強めさせ、反米暴動を激化させようという狙いがあった。

* テロ事件後の国連活動について

2004年 8月に昨年のテロ事件から空席だったイラク担当の事務総長特別代表に、カジ特別代表が就任した。カジ代表は占領軍からイラク統治を譲られたイラク暫定統治機構を助け、2005年 1月に予定している国民選挙実現を目指しており、復興関与の再開に一步前進の気配が見えるのだが、国連職員のイラク派遣団600人を護衛するには最低5,000人の警備兵が必要な割には、どの国も手を挙げる国は無く、現在も国連職員はテロの危険にさらされており、苦悩が深い。

3, レファレンス

・概略（ウェブサイト）

現在のイラクと国連の状況を知るためのページには色々あるが、下記のページが一番わかり易い。

・国連トップページのイラク情勢ページ

<http://www.un.org/>



* 国連トップページの “ The situation in IRAQ ” から入る。

・外務省

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/iraq/josei.html>

イラク問題についての概況が分かり易く説明され、かつ日本の支援についても詳しく触れている。

・概略（出版物）

出版物については、下記のデータベースで検索することができる。

・UNBIS-NET(UN Bibliographic Information System)

<http://unbisnet.un.org/>

国連ダグハマーシヨルド図書館と国連ジュネーブ図書館に受け入れられた資料が検索できる。

4, この一年

・概略

この一年に作成・刊行された資料を列挙する。

（国連文書）

- ・ Report of the Secretary-General pursuant to paragraph 30 of resolution 1546 (2004)
安保理決議1546をうけて作成された、イラクにおける国連復興活動の最新報告書。現在、国連が現地で何をしているかが分かる。

- ・ Security Council resolution 1546 (2004) [on formation of a sovereign Interim Government of Iraq] Resolution 1546 (2004)
安保理決議1546。
イラク暫定政府 (Interim Government of Iraq) を承認。占領状態を終了。
民主政権樹立のための準備について。
国連イラク支援団 (UNAMI) に議会 , 選挙 , 憲法成立の支援・援助を委任。
また社会復興事業も行うよう委任。
治安維持のため多国籍軍の駐留を承認。

(図書)

- ・ イラク戦争と占領 / 酒井啓子著 岩波新書
- ・ イラク建国 : 「不可能な国家」の原点 / 阿部重夫著

(雑誌論文)

- ・ 主権移譲後も見えないイラクでの国連の役割
- 治安回復の兆し無く , 権限も限定的に
(特集 イラク主権移譲) / 淡路 愛
「世界週報」v .85(25)(通号 4153) [2004 . 7.6] p .14 ~ p .17
- ・ イラク復興 変遷を重ねる米国の対国連政策 / 五十嵐浩司 (イガラシ コウジ)
「AIR 21 : 朝日総研リポート」(167) [2004 . 04] p .63 ~ p .71
- ・ 国連 イラク復興の「立役者」に急浮上した国連 - 米国の計画破綻で試される手腕 / 淡路愛
「世界週報」v .85(10)(通号 4138) [2004 . 3.16] p .22 ~ p .24
- ・ イラクの戦後復興における国連 (特集 国連は必要とされているか) / 奥 克彦
「外交フォーラム : Gaiko forum」v .16(11) (通号 184) [2003.11] p .46 ~ p .49

(よしうえ・しょうえい)

一橋大学社会科学古典資料センター主催

第24回西洋社会科学古典資料講習会を受講して

情報管理課受入係 木戸 浦 豊 和

よく知られているように、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」には様々な異同を含んだ刊本が複数存在します。賢治が遺した原稿は未完だったうえにおびただしい加筆・改変が施されており、草稿の解釈の相違が差異を伴う刊本を生んで来りました。

もちろん「銀河鉄道の夜」のように、作者の死後もなお生成し、変化し続けている作品の例は極端であるかもしれませんが、しかし、作者の手に成る原稿が活字化される過程において変更を蒙る可能性は常に潜在します。

標記の講習会における「書誌学」関連の講義の1つ、「図書館員のための書誌学入門 - 記述書誌の読み方を中心に」(講師：大東文化大学助教授 武者小路信和氏)では、原稿が、植字工、印刷工、校訂者などを経て出版されることによって、本文が変更されて行く原因について、模型や映像などを用いて具体的な解説がありました。植字工は、テキストの意味を正確に伝えることは心がけていたということですが、概して綴り字の異同については無頓着であり、特に、技術の未熟な活字印刷の揺籃期においては、同じ版・同じ刷でも異同が生じる場合が多いということでした。しかし、僅かな綴りの相違が本文を読解するうえでの重要な相違を生み出すということは十分に想定され得ることです。

本講義ではさらに書物の物理的な側面に注目することの必要性が指摘されました。書物はただ単に意味を盛るための器ではなく、書物それ自体にも作者の意図が反映している場合も多いのです。装幀や活字や挿し絵なども含めて、書物全体で一つの作品を構成していると言えます。例えば村上春樹は、用紙や活字の選定、表

紙のデザイン、帯の文章、広告の文案、さらには価格の決定(!)にまで、可能な限り積極的に関与すると述べています^(注)。図書館が出来る限り書物を原型のままに保存することが望まれるゆえんです。

以上、個人的な関心に基づき本講習会から学び得たことについて記しました。本講習会は、書誌学の他に、「古典研究」、「保存」の3つの分野から成り、それぞれの講義は、各先生方の「書物への愛」が伝わってくるような、たいへんに充実したものでした。これまで図書館に関するいくつかの講習会に参加しましたが、今回のように、書物に関わることの醍醐味を再確認することのできる講習会というのは貴重であるかもしれません。

この講習会を受講した11月9日から11月12日は、国立駅から続く大学通りの並木がちょうど色づき初める頃でした。その美しい時期に、このような素晴らしい講習会に参加する機会を与えていただいたことに改めて感謝申し上げます。

注

『村上春樹編集長 少年カフカ』新潮社、2003.6

(きどうら・とよかず)

最近の話題から (その2) 「姫国山海録」

関覧第二係 佐藤 初美

「体は雪のように白く、山石（火打ち石）を食べる虫」、「這ったあとが毒で黄色に染まり、塩水をかけると溶ける虫」などなど。これは、本学狩野文庫所蔵『姫国山海録』（宝暦12年（1762年））に記載されている怪虫の記述です。この本は、こうした類の得体の知れない虫などの図を、その発見場所、簡単な生態の様子などを示す短い文とともに収めた資料です。



図 - 1 「石虫」山城国（現在の京都府）鞍馬山に住む。長さは5、6寸で雪のように白く、腹部は淡い紅色をしている（左図）



図 - 2 「海辺の怪虫」津軽の海辺で、秋にできて粟の穂を食べる。享保のころ、土地の人が槍で殺し、その後は見られなくなったという。（右図）

2004年夏に、川崎市市民ミュージアムで「日本の幻獣」展が開催され、各種メディアでも大

きく取り上げられました。その展示会に出品要請があったのがこの『姫国山海録』で、怪虫たちの素朴とも言えるイラストが中心の資料です。展示会に本を出品した場合、その中の特定のページを固定して展示する場合がございますが、そうするとそのページしか来館者は見ることができません。川崎の展示においては、各ページを撮影したパネルを用意し、ほとんどのページを展示するという特別な扱いをしていただきました。展示会の関連イベントで「幻獣トーク」を行った作家の京極夏彦氏が「この本欲しい！」と絶賛していた、と担当の学芸員の方から伺いました。それだけ、この本が魅力にあふれているということでしょう。



図 - 3 「加賀の怪魚」加賀の海中に住み、頭は女人のようで、口から火焰を吐くとされる。（左図）

「姫国」とは日本の異称です。そして「山海録」は、中国の古い資料『山海経』を模したものと見られています。『山海経』とは、四千年ともいわれる中国の歴史の中で形を成してきた神話的な資料です。成立年代も定かではありませんが、史記を編纂した司馬遷（前145 - ?）は著作の中でこの資料に言及し、その内容があまりにも荒唐無稽であることから見る価値もな

いとの評価を下しています。



図 - 4 『山海経』 狩野文庫所蔵

『山海経』は、「山経」と「海経」に大きく分かれています。どちらにも共通するのは、「通常人々が暮らしている世界の外側」を記述対象としていることです。山経の方は、人々が暮らしている里の少し外側、つまり山々がそびえ大河が流れていて、そこから先へ行くことは当時の人々にはひどく恐ろしいことに思えたであろう世界のことです。海経はさらに外側の世界で、非中国世界を扱っているものと考えられています。

『山海経』の中には、これでもかと思うほど奇怪な怪物が描かれ、その恐ろしげな生態が描かれています。モチーフとしては蛇の登場回数が多いようで、頭がたくさんあるとか羽がついているとか姿をいろいろに変えながら何度も登場しています。当時、実際に蛇の毒で命を落とすことなども多かったであろうと思われ、蛇に対する恐れがそのような形で現れているのであろうとの見方もあります。また、現代でもおなじみの九尾の狐などもこの中に描かれています。

しかし、『山海経』に描かれているのはそういった動物ばかりではありません。多くの山や川の名前なども出てきます。ただ、それらが現在のどこの地形を指しているのかなどはほとんど不明で、時代の変遷による地名の変化のせいもあるのですが、それも信頼のおけぬ資料

とみなされてしまっている一因と考えられます。

さて、『山海経』は日本には9世紀末には伝わっていたと考えられているようです。江戸期に刊本として寛文10年（1670年）に出版されて以来、これを真似た本が多く出されたといえます。当時の日本はこれらの怪物以外にも、「妖怪」だの「物の怪」だの「幽霊」だのといった「化け物文化」が開花しつつある時期でもあり、さらに植物・昆虫などの彩色絵本が作られるようになった時期でもあります。類似の書物が次々に出されたもの不思議ではないでしょう。狩野文庫にも化け物関連の資料は多く収蔵されています。

本来の『山海経』が非常に大部で、収録している事物も数多いのに比べ、『姫国山海録』は全25種のあっさりした資料ではありますが、しかし、ここにも数点写真を掲載しましたが、その図に示された怪虫たちがまったく怖くなく、ほのぼのとした愛らしい印象さえ与えているところに魅力の一端があるように思います。また、添えられた文章も実録の形式をとっており、どこそこにもこのように現れて悪さをしたなどと、いかにも見てきたように書いてあります。地名は実際のものでし、当時の人々が興味津々で読んだであろうことは想像に難くありません。

当時の日本人の娯楽だったであろう資料ですが、ほかの関連資料と合わせ企画展などで紹介していけたらと思います。

【参考文献】

1. 川崎市民ミュージアム. 『日本の幻獣 - 未確認生物出現録 - 』. 2004
2. 伊藤清司. 『中国の神獣・悪鬼たち - 山海経の世界 - 』. 東方書店, 1986
3. 近藤瑞木. 『百鬼繚乱 - 江戸怪談・妖怪絵本集成』. 国書刊行会, 2002

(さとう・はつみ)

平成16年度図書館職員総合研修会を開催

附属図書館では、平成16年12月1日に毎年度恒例の図書館職員総合研修会を開催しました。今年度の講演者は、国立情報学研究所開発・事業部次長の小西和信氏と宮城県図書館長の伊達宗弘氏でした。

小西氏からは、『図書館で働くということ：いい仕事のできる図書館員を目指して』という演題で、北海道大学、学術情報センター、日本学術振興会などでの多彩な経験をもとに、これからの大学図書館職員が、どのようなモチベーションと姿勢で仕事に取り組んでいけばよいのかについてご講演いただきました。

講演内容では特に、何かする人々にサービスするのが図書館員で、利用者の喜びが図書館員の喜びであること、他人を説得する論理力とプレゼン力が大切であること、規則を振り回すのではなく、柔軟性をもって利用者を第1に考えること、最強の原則は24時間図書館のことを考え、図書館に情熱をもつことであるなどの主張が強く印象に残りました。

また伊達氏からは、『22世紀を牽引する叡智の杜づくり事業：次世代を育成するための図書館の役割』という演題で、貴重書の修復保存・活用、手作り企画展や住民参加ゼミナールなどの宮城県図書館での多彩で意欲的な活動をご紹介いただき、それらがいかに次世代の育成につながるのか、図書館員の資質向上につながるのかについてご講演いただきました。

講演内容では特に、図書館は貴重書という文化財を保存するとともに、それを広く県民や高校生などの若い世代の人々に知ってもらう活動を行なうことが大切であること、図書を通じて古来からの文化に親しんでもらい、若い世代の豊かな感性を育てる活動を行なうのが

図書館であること、それらの活動を通じて、図書館員ひとりひとりの個性と熱意を生かす職場を目指しているなどの言葉は、参加者にとって貴重な激励となるものでした。

お二方ともに、図書館という仕事に対する熱意が感じられる意欲的な講演で、講演後のアンケート結果も非常に好評でした。参加者にとって図書館員としての初心を想起させる充実した講演会であったという意見が多数寄せられました。

なおこの研修会には、東北大学のほか東北地区の国・私立9大学図書館から19名、また、宮城県図書館から6名、全体では70名を越す参加があり、館種を超えた東北地区全体の図書館活動の活性化につながる研修会として、成功裏に終了しました。



講演する伊達宮城県図書館長

平成16年度図書館職員研修委員

米澤	誠（総務課情報企画係）
阿部	佳市（情報管理課受入係）
半澤	智絵（情報管理課雑誌情報係）
後藤	敏行（情報サービス課閲覧第一係）
佐藤	初美（情報サービス課閲覧第二係）

（平成16年度図書館職員研修委員）

平成16年度情報検索講習会（外国語文献）

Web of Science の - 基礎 - の開催

参考調査係

平成16年度情報検索講習会（外国語文献）Web of Scienceの - 基礎 - は、10月19日～10月21日の期間、当館システム研修室で開催された。当講習会は、THOMSON SCIENTIFIC社のデータベースであるWeb of Scienceの最低限の利用知識を講習することが目的で、この3日間のあいだ、学生院生のみならず教職員も含めて30名の参加があった。

Web of Scienceとは、外国語の雑誌論文を検索できるだけでなく、その論文の引用関係・被引用関係を調べることができる非常に便利なデータベースで、分野は自然科学のみならず、社会科学、人文科学の分野の論文も検索できるという網羅的性格も持っている。

当講習会は当係の初めての試みとして、ホームページに予め作成しておいたWeb of Science 学習用ページ（「Web of Science 仮想講習会」表1、表2を参考にしてください。）を使用し、実習と演習を絡ませた内容で行った。具体的には、Web of Science について学習ページ上で、実際使っている様に画面を推移させながら、その画面の重要ポイントを追って行くという内容である。このWeb of Science 学習用ページを使用する事で、機能と収容データの膨大なこのWeb of Science というデータベースについて、図書館員からの説明が冗長にならず要点を簡潔に伝えることができ、参加者にとっても理解し易い講習会が実現できたと思う。実



表2 実際の講習画面

際に参加者からの声に「実際にデータベースを使いながら並行して学習用ページを確認でき、自分のペースで学習できて良かった。」や「後から復習ができるので、とても役立つ。」というものがあつた。

広報は、掲示ポスター、図書館ホームページを通じて行い、学部教務掛から全教官へ授業内での周知をお願いするメール配信の依頼や、本館館内や生協食堂での広告配布作業も行った。

その努力のせいか参加者が例年に比べ大幅に増加した。

なお、当講習会で使用したWeb of Science 学習用ページ（「Web of Science 仮想講習会」）は、当講習会参加者の復習用のみならず、潜在的利用者の自学自習のため下記のURLで公開しているので興味がある方は是非一度ご覧下さい。



表1 Web of Science 仮想講習会トップ
(<http://www.library.tohoku.ac.jp/main/w-science/1-top.html>)



本館トップページからリンク有り

会 議

学 内

16.11.29 平成16年度第3回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 平成16年度第2回附属図書館商議会議題について
- 2) 図書館副館長の選考について
- 3) 平成16年度第2回学術情報整備検討委員会並びに学術情報資料選定小委員会(合同会議)について
- 4) 学生用図書整備検討委員会について
- 5) 日曜・祝日開館経費について
- 6) その他

・報告事項

- 1) 平成16年度第1回川内地区図書委員会について
- 2) 国立大学等職員採用試験関係委員会について
- 3) 全学教育科目支援授業としての「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」について
- 4) 企画展・シンポジウム・記念講演会について
- 5) 外国雑誌の予約状況について
- 6) 電子ジャーナルの適正使用について
- 7) 狩野文庫のマイクロ販売について
- 8) その他

16.11.29 平成16年度第2回附属図書館商議会議

・協議事項

- 1) 図書館副館長の選考について
- 2) 計画的年次有給休暇に伴う附属図書館の開閉館について
- 3) 学術情報整備計画について
- 4) 学生用図書整備計画(中間報告)について
- 5) 日曜・祝日開館経費について
- 6) その他

・報告事項

- 1) 図書館商議会議程の一部改正について
- 2) 平成16年度第2回学術情報整備検討委員会並びに学術情報資料選定小委員会(合同会議)について
- 3) 学生用図書整備検討委員会について
- 4) 平成16年度第1回川内地区図書委員会について
- 5) 全学教育科目支援授業としての「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」について
- 6) 外国雑誌の予約状況について
- 7) 企画展・シンポジウム・記念講演会について
- 8) 電子ジャーナルの適正使用について
- 9) 狩野文庫のマイクロ販売について
- 10) 各分館からの報告について
- 11) その他

人 事 異 動

平成16年12月31日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
16.10. 1	任期付職員（総務課・庶務係）	浅 沼 良 子		採 用
"	事務補佐員(総務課・情報企画係)	土 田 菜穂子		"
"	事務補佐員（情報管理課・図書情報係）	菊 池 真 琴		"
16.12. 1	附属図書館副館長	今 泉 隆 雄	附属図書館副館長	再 任

編 集 後 記

12月13日の深夜、家族で、ふたご座流星群を見た。毎年同じ時期に観望できるらしい。1分間に2個出現する時もあり、期待以上の天体ショーに興奮した。彗星から流れ出した固体粒子が地球の大気に飛び込んだとき、猛烈な摩擦で高温のガスとなり、このプラズマが光を出して流れ星になる。粒子の大きさは、直径1ミリから数センチ、質量1グラム以下と、まさに宇宙の塵である。星空を眺めながら、古の人々に思いを馳せた。ところが、この流星群の初観測は1862年というから、幕末以前のわたしたちの祖先は、見ていなかったことになる。そして、地球や木星の重力の影響により、その軌道は次第

に地球から離れ、2100年には見られなくなるという。

星を見た同じ日、日本漢字能力検定協会は、恒例の「今年の漢字」を発表した。2004年の世相を象徴したのは「災」だった。新潟県中越地震や台風などの天災、スマトラ島沖地震による津波災害、イラクでの人質殺害や幼児殺人などの人災が多発したことを反映していた。「災い転じて・・・」の希望と祈りも込められているという。

そして、国立大学の法人化元年。今年の図書館界を象徴する漢字は何であろう。ふたご座の流れ星を眺望しながら、何度も願いを懸けた。

(Y)

東北大学附属図書館報「木這子」 第29巻第3号（通巻108号）発行日 平成16年12月31日

発行人 内藤 英雄 広報委員長 諏訪田 義美

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-217-5911, FAX 022-217-5909
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>